

氏名(本籍)	渡辺 舞(北海道)
専攻分野の名称	博士(社会福祉学)
学位記番号	博第4号(甲第4号)
学位授与の日付	平成23年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	大学生の友人関係における親密化過程と大学生活の適応感に関する研究 —大学4年間における追跡的研究と回想的調査面接による検討—
論文審査委員	主査 北星学園大学教授 豊村 和真 副査 北星学園大学教授 今川 民雄(指導教授) 副査 北星学園大学教授 栗林 克匡 委員長 北星学園大学教授 杉岡 直人

学位論文審査要旨

渡辺舞氏の学位論文「大学生の友人関係における親密化過程と大学生活の適応感に関する研究—大学4年間における追跡的研究と回想的調査面接による検討—」は、表題の示すとおり、大学生の友人関係における親密化過程と大学生活の適応感について、縦断研究および、面接調査研究を中心として多様な検討を行ないつつ、それらに新たな知見を加えたものである。

一 本論文の構成

本論文は、以下のように構成されている。

目次

- 第1章 青年期の友人関係における親密化過程研究の理論的背景
 - 第1節 本章の目的
 - 第2節 青年期の友人関係の特徴に関する先行研究
 - 第3節 青年期の友人関係における親密化過程に関する先行研究
 - 第4節 友人関係が大学適応感に及ぼす影響に関する先行研究
 - 第5節 本章のまとめ
- 第2章 本論文の目的・構成
 - 第1節 問題の所在
 - 第2節 本論文の目的と構成
- 第3章 研究1 大学生の新旧友人関係に関する追跡的研究
 - 第1節 研究1の目的
 - 第2節 新友人と旧友人における友人関係の追跡的検討
 - 第3節 友人関係期待における新旧友人の比較検討

第4節	研究1の考察
第5節	本章のまとめ
第4章	研究2 大学生の一番親しい友人の選択に関する追跡的研究
第1節	研究2の目的
第2節	友人選択が友人関係の評定に及ぼす影響の検討
第3節	友人選択に関わる要因の検討
第4節	大学4年間の追跡的研究による友人選択の検討
第5節	研究2の考察
第6節	本章のまとめ
第5章	研究3 回想的調査面接による大学生の友人関係の親密化過程に関する研究
第1節	研究3の目的
第2節	回想的調査面接法の検討
第3節	回想的調査面接による親密化過程の類型化の検討
第4節	回想的調査面接による親密化過程の類型化の適用
第5節	研究3の考察
第6節	本章のまとめ
第6章	研究4 大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響に関する検討
第1節	研究4の目的
第2節	大学生活に関する適応感に関する項目の収集と尺度の作成
第3節	大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討 (量的データによる検討)
第4節	大学生の友人関係における親密化過程と適応感に関する検討 (質的データによる検討)
第5節	研究4の考察
第6節	本章のまとめ
第7章	総括と今後の課題
第1節	総括
第2節	本論文の意義
第3節	今後の課題
第8章	要約
第1節	要約
第2節	おわりに
	引用文献
	資料

二 本論文の概要

第1章では、第1に青年期の友人関係研究全般に関する研究を概観した。そこでは青年期における友人関係の重要性を明らかにするために、友人関係の機能、友人への期待、友人にとの付き合い方等に関する多くの知見を示した。第2に、友人関係の親密化過程研究を概観し、「関係性の初期分化」や「段階理論」の両視点による検証から二者関係が進展するメカニズムが明らかにされてきたことを確認した。一方で友人関係の特徴として、多くの場合複数の対人関係で構成されていることが指摘されたこと、主な親密化過程の研究では、友人を1名に限定した手続きを使用した上で、その過程が検討されてきたことを確認した。第3に、大学生活の適応感に関する研究については、大学生活の適応感は、入学当初のみならず青年のその後の人生にも大きな影響を与える可能性があり、近年の大学教育現場においても大きな関心事であることを文献で示した。そして、本邦でも適応感に関する研究も多く、大学生活と適応感の関連や適応感に関わる要因として大学生の友人関係の在り方が影響すること、また入学時から大学生活の過程の中で適応感が変動することを確認した。

第2章では、第1章において概観した先行研究の知見を踏まえ、問題の所在を述べている。それは、第1に、現実場面の生き生きとした青年期の友人関係を明らかにするために、これまで検討されることが少なかった複数友人関係を研究対象とし、その親密化過程を検討する視点が必要であること、そして第2に、大学生活全般に渡る青年期の友人関係と大学生活への適応感を明らかにする視点が必要であることである。

次いで本論文の目的を述べている。それは以下の2点である。第1に、大学生の友人関係の親密化過程を複数の友人関係の過程として捉え、長期的な追跡的研究から既存の二者関係における親密化過程理論に囚われない過程を明らかにすることである。第2に第1の目的で明らかにされる複数友人関係で構成される親密化過程が、大学生活の適応感に及ぼす影響を明らかにすることである。

以上2点の目的を明らかにするために、第1の目的は第3・4・5章で、第2の目的は、第3章～5章の結果を受け、第6章で明らかにされている。章別の概要は以下のとおりである。

第3章の目的と結果

友人関係が複数対人関係で構成されることの背景の一つとして、大学入学する前の友人関係（旧友人）と大学に入学後に知り合った友人関係（新友人）が同時期に存在していることに注目し、入学当初から、両者の関係を追跡的に比較検討することから、大学生活での両者の関係の推移を明らかにすることを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。大学入学という進学によって新友人関係がスタートする中で、少なくとも入学後約1年間は旧友人の存在は安定的かつ親密なものであり、また新友人とは異なる関係期待がある相手として大学生の友人関係で存在していることが明らかになった。また新友人の存在は、1年間で旧友人を上回るような関係には発展しないが、ポジティブな認知や行動が増加する推移を明らかにした。また両者への親密度・感情・認知・行動は、一方が他方に影響するだけでなく、互いに影響しあうことを明らかにした。

第4章の目的と結果

大学生における友人関係の親密化過程について、二者関係の過程のみならず、複数で構成される友人関係の過程を抽出する必要があることを確認するために、「一番親しい友人」が大学4年間の中で、どのように選択されていくのかの過程（「友人選択」と定義し、以下で使用）を明らかにすることを目的とした。また一番親しい友人が変化する場合には、「共通する親しい友人グループ内で変化した」ものであるのか、または「全く別の友人関係が存在し変化した」ものなのかを面接調査から抽出して検討することも目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。協力者のうち約25%は、大学生生活の過程において、一番親しい友人が一度も変化しないことを確認した。その一方で、約75%の協力者が、一番親しい友人を大学生生活の中で変えたことは、友人関係の親密化過程を複数対人関係の過程として捉える事の必要性を確認する目的を達成したものである。また、友人選択は、共通するグループ関係の中で変化したパターンと共通する友人グループとは別の友人関係から選択されるパターンを確認した。この結果は、大学生の友人関係の親密化過程が、単に複数友人関係で構成されているという事実だけでなく、大学生の友人関係には複数の友人関係グループが存在し、多様な関係の中で一番親しい友人が選択されている過程が明らかにされたものである。

第5章の目的と結果

第4章では、「一番親しい友人」を追跡的調査で毎回選択してもらおう手続きを採用することにより、複数友人関係で親密化過程を抽出する必要性を確認した。また、大学生が、複数の友人関係グループを有し、その中で「友人選択」がなされている状況が確認されたことは、従来の質問紙調査の量的検討のみで、友人関係が進展していくことを抽出することへの限界が明らかになった。第5章では、複数対人関係の親密化過程を抽出するために、「回想的調査面接法」を採用し、手続きを確立すること目的とした。また複数友人関係の親密化過程のパターンを明らかにする類型化を提案するために探索的検討と適用を行うことを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。回想的調査面接導入の意義は、複数の対人関係を同時的に抽出し、その推移を明らかにすることができたことである。現時点での1番親しい友人を選択してもらったうえで、入学当初からのエピソードを、共通する友人のエピソードも含めて回想することでその過程を明らかにすることを実現した。第1に、手続きを確立する調査を実施し、質問項目の設定と手続きが有効であることを確認した。第2に複数友人関係の親密化過程のパターンを提案する試みとして発話の過程から類型化を探索的検討の上、類型化に使用する項目を決定し、適用する目的を達成した。回想的調査面接から得られた複数友人関係を対象とした親密化過程では、90%以上が複数友人関係で推移する状況が確認できるだけでなく、共通する友人グループ内の変動やグループ関係を認知しつつも、協力者が一番親しい友人との間だけで共有する特別な行動や経験があることを確認することが可能であり、最終的に7つの型で親密化過程のパターンが説明された。類型化の適用については、各事例で3者判定を導入することで、ある程度客観的基準の中で判定可能なことも確認した。

第6章の目的と結果

第3章から第5章で明らかにされた知見は、大学生の友人関係が多くの場合に複数の友人関係の中で成立し、推移していく過程を抽出することの意義を提供するものであった。第6章では、これらの過程で抽出された大学生の友人関係が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討することである。具体的には、複数友人関係の背景のひとつとして注目した新旧友人関係と適応感、新友人の友人選択と適応感、さらに複数友人関係の親密化過程と適応感との関連を明らかにしていくことを目的とした。

結果として明らかになったことは以下の通りである。第1に、大学入学後に知り合った親友と呼べる人物が、大学生活の中でできたことは、大学生活の適応感を高めることが明らかとなった。第2に大学入学後に知り合った「一番親しい友人」を大学生活の中で変更する群の適応感が、一貫して同じ友人を選択した群の適応感よりも高かった。第3に、複数友人関係の親密化過程において、友人関係が変動する出来事を経験することや、複数友人関係で推移している過程の中で、一番親しい友人と二者で共有する行動や経験があることが、大学適応感を高めていた。以上の結果から、大学生活の友人関係が複数友人関係で構成される中で、その関係が適応感に及ぼす影響を明らかにする目的を達成した。

第7章と第8章では、第3章から第6章までの本論文の実証的研究から得られた知見から、大学4年間における追跡的調査と回想的調査面接によって明らかにされた大学生の複数友人関係における親密化過程、およびその過程が大学生活の適応感におよぼす影響についての知見を整理した上で、本研究の意義と今後の展望について論じている。

本論文の意義としては以下の点があげられる。第1に、量的なアプローチと質的アプローチの研究を組み合わせることで、二者関係の推移に限定することなく、大学生の複数友人関係の親密化過程を抽出することを可能としたことである。第2に、大学入学当初から大学4年時に渡りほぼ大学生活全般を網羅する追跡的研究を実施した。すなわち単時点にとどまらない関係の推移を抽出可能とした意義が存在する。第3に、単時点の友人関係や特定の友人に対する親密化過程と適応感との関連だけでなく、大学生の複数友人関係の過程と適応感の関連を明らかにしたことである。

最後に、本論文の課題をあげてあり、最終章の第8章では各章を集約した要約がなされている。

三 本論文の評価

以上に要約された渡辺舞氏の学位論文は、以下の点が高く評価された。

端的に表現すると、多様な多変量解析を用いた量的研究のみならず質的研究を含んで大量のデータについて、個別の研究としてみるとほぼ適切に分析がなされ、一定の成果を上げていることである。

以下にその例をあげると、分析については、第3章では、因子分析、分散分析とLCM（潜在曲線モデル）のように個別的な分析と総合的な分析を試みつつ、新旧友人関係の縦断的变化を追求している。なお、第3章第3節ではALSCAL（多次元尺度構成法）も

実施している。第4章では、分散分析（多重比較含む）を駆使して大学生の一番親しい友人の選択に関する検討をおこなっている。第5章では、回想的調査面接法により大学生の友人関係の親密化過程に関する研究を行い、その類型化を試みている。第6章では、因子分析およびL C Mを用いて、大学生の友人関係における親密化過程の様相が大学生活の適応感に及ぼす影響を検討している。本章ではさらに質的データによる検討もおこなっている。これらの研究の一つ一つが独立した論文として十分な程度に分析がなされ、まとまった成果となっている。

親密化過程のような複雑な過程を考察する際に、データを得るのが難しい縦断研究や調査面接を行ない質的な変化についても検討していることも評価できる。また同様に親密化過程の検討について複数の友人関係について言及しており、従来知見である二者関係では明らかにできない領域まで踏み込んでいることも評価できる。さらに親密化過程が大学生活の適応感におよぼす影響について検討していることを含め、これらの内容は、現時点ではまだ統一的に記述はできてはいないと思われるが、この領域については新たな方向性を示しているといえる。

以上のような概観は、全体的な合理性・論理性・実証性の観点から総体的に十分に評価されるものであるとの審査委員の合意であったが、同時に以下のような問題点及び今後の課題も審査委員から指摘された。

- ①若干記述および構成に荒削りな部分がある。
- ②各研究の目的あるいは仮説を定める根拠が必ずしも十分ではない。
- ③多様な解析を実施した結果としてそれらの解釈が統一的になされていない部分がある。
- ④総合的な研究としてのまとまりに欠ける部分がある。即ち、最終的に解明しようとする内容が必ずしも明瞭ではない。

これらの指摘は、主として今後に残されている課題として展開が期待されたものであり、本論文の成果自体の評価を低めるものではないと考える。

以上の審査結果から、審査委員一同は、本論文が学位論文として学術的水準に充分達していることを認め、更に口述試験の成績をも考慮して、渡辺舞氏に、北星学園大学博士(社会福祉学)の学位を授与することが適当であると結論する。

学位論文最終試験の結果の要旨

2011年2月1日、学位授与申請者渡辺舞氏の最終試験を行った。

試験において、提出論文「大学生の友人関係における親密化過程と大学生活の適応感に関する研究—大学4年間における追跡的研究と回想的調査面接による検討—」に基づき、審査委員が疑問点につき逐一説明を求めたのに対し、渡辺氏は論文にはあえて触れていない知見も踏まえて、いずれも適切な説明を行い、審査委員の疑問をほぼ解消した。